

通信・あなご

・19

■発行・岩手県北上市青柳町二丁目6-44・小泉麗子

あなごの(可也)

けエ多・和田吉さん。あの人頼んでネ。方角見たりちよつと良い所あったんたつて……。それの良いこ向けたのだから、「なすてるねえ」して、言うんであんすけをねえ。

拜む人は、「ごにいままで、底で長年苦すませでありて、そこ見るせるごねえたつて……。」「そうだつて、ああいう順になつてすまつてから、一建ててしまつてから」とつてと、わたすたらなあすかぬかっけをや、……。。

トキ工。拜む人かす。二十一日向、「何百年も水の中にいたんたから、建る時行つてオレか、お祓りするからして言われたつたをの。すたきや、二十一日ごうか、一日とお祓えすねえうつに、改良区で、建てるさんたをの……。うたから、よひいにも、腹立つたのス。

とすこ、お祭りする時も、拜む人で、せむせむ音こをなにもにかつたをの……。オラたちやつたのたねえから、とうにも出来ねえかつたけい

も、「あら、あの人……拝む人さお使ひすてもう
いでエッして言うたけえネ。「ああきつした、き
つした。あれはきつした。そんな人きつした。し
つて言うたその……。「笑」じうにもなうなくて
ネ。まるでヘン曲けつれて目に合つたもの……。

ワエウ。それで、とつても……あの改良区は、その
ようにして、皆の力を建てたけれど、「あし
さん」たつて、休まる所ねえはわかねえんたから、
あのお堂を建てたうえんたねか、つて言われど、あ
のお堂をこつちさ建てたのは、「六角堂」建てた
のは、わたしたち三人の力を建てたの……。

キウ。誰にも手伝えすてもらねえど、その時は、
拝む人招んだのす。

サエウ。二年目に、わたすたらあす建ててか……。
お堂建ててか……。去年や、はり改良区の人た
ち招んで、その時は拝む人も招んでか……。

トキ工。拝む人は招はねえ……。

ワエウ。招はねえか……。

トキ工。去年……。

サエウ。五年、あらたに招んだのか……。

なにが、あの……。わたしたちもハ。ホントに
前から、そういう偏見つていうたか、「拝む人」
なんていうと、普通なにかつき合いたくねえぶう
な感じもするし、招はねえつていう事もわかるの
す。拝む人も、普通の事務員として働いていたん
だとも……。

まあ、それでネ。こんなこともあれだけんとも
やっはり、おかしうから、あそこの家で、「あし
さん」泊めた前だあ……なんていうと、その
家でもまあ、不幸つていうか、やっはり良手続か
ねかつたんだネ。おかしうからネ。それでやっは
り拝むでもうかなにかすたんでかすけ……。そ
すたらやっはり、牛と、その「あしさん」の姿、
観音さまにすてネ、拝んだ方ええつて言われたん
であんすべ。それで自分の家でネ。このくいなな
んだか……。牛とおしさんのお姿を作って、お堂

を建ててあつたのす。それでネ。あるからええか
つて商いたう、コなに、あんなの唄、飛んでしま
うへしつて、拝み人言つた心かつて……。
風で、何回となく飛んだたをね。

さわりがまわる

トキエ。気にかつたのはす。そこのおはあさんが
す。皆さ言つてあんすけをネ。川前す。前でエ、海
めた所の別家たち、コみを独身にすてやうからな
あしつて拜んでもらつたら言われたつて、そこの
おはあさん平気で言つてあんすけをなあ……。

キ　ワ。マサラさん来たばかりの時に「嫁に」拜ん
ごもつたときも言われたつて……。すたきや、マ
ワラさん、コしや、オラホテ、わかぬえしつて……
(笑)あや、マサラさんた、たいへんたなあ……
と思つてうけえ、(笑)われ(自分か)一番先に
そうなつてさんた……。 (笑)

トキエ・とすたきや、ほんとうだモノ……。

キ　ワ。おら家のあじいさんか、マワラさんの別家
か、お皆さんに来た人たもの。すかすかどう
いう風になつて、独自でえらたも……。

サエる。川前してネ。別家すのホラ、むかしから
の家たからネ。

キ　ワ。あじいさんでねく、弟、ホレ、何年を病氣
すてね。ただ居るばかりでねく、ものすこく、ひ
じくなつてたをの。

なに、川前の系統なれた、コあじいさんのこと
昔うねねはえかつたなあ……。じつて、家さ(実家)
行つて語つたのよは……。とすたきや、東京の姉
に、こういう風に語つたの。

「あめえひな。あじいさんのごじはり、川前だ
かその人はり怨んたつてわかぬえんた。あめえひ
その人受けねはねえ、なにか因縁があつたんだし
つて言われたの。

わたしはシヤ。あかみさんさ行つた時シヤ。コ
あんなは、なんほしても拜まねはねえ人に生まれ
て来たんだよ。しつて言われたの……。

和賀の昔話

瓜姫の子

NO. 19

昔、爺と、婆とあつたけい。
 婆あ川で洗濯に行つたけい。
 洗濯してゐる川上から大きな
 瓜あ流れて来るけい。婆あ、
 「ええ、瓜たらこつちやこ、
 ゆり瓜たらあつち行はして、
 言うて、瓜あ婆あの方で流れ
 て来たけい。立派な瓜だけい。
 婆あ、その瓜拾つて、「家
 へ行つて、爺と二人して食う
 へして、家さ持つて来たけい。
 爺も大変よろこんで、皮丁
 で切るへとしたら、瓜あ二つ
 に割れて、中から女の子あ出
 て来たけい。二人にあ、子供
 あなかつたから、とても喜ん
 で、「瓜から生まれたから、
 瓜姫とす名前にするへして、
 言つて育てたけい。瓜姫とあ
 一ひんかしえれば一杯だけ、
 二ひんかしえれば二ひんだけ、

三ひんかしえれば、三ひんだけ、すんすん大きく
 なつたけい。
 瓜姫とあ何あしえても、何でもよく出来たけい。
 心も機織あ一番好きで、一番上手だけい。毎日毎日
 ピッピ—カッカ、ナーナイロ
 ク—タニエクテモ、ナーナイロ
 ナ—ナイロ、ピッピカッカ、ピーカッカ
 と歌いながら織つて居たけい。
 あるとき、爺あ山さ木切りに、婆あ川で洗濯に
 行くとき、「瓜姫と、誰あ来てと戸あけるなよ
 一番えくにえなあまのしゃくだいも、あまのしゃ
 くだい、何と言つたつて戸開けるな」と、あしえで
 出かけたけい。瓜姫とあ一人で
 ピッピ—カッカ、ナーナイロ
 ク—タニエクテモ、ナーナイロ
 ナ—ナイロ、ピッピカッカ、ピーカッカ

心、機織（機織）つて居た。そしては、あまのしゃくあ
 来て、「狐姫ろ、あに（あに）さ出はつて、あすはにえ
 かし「爺さまの選さまにあころれるからやんた」
 「とんだら、オレエ家さひえつて越ふから、戸あ
 けてけろし「爺さまの選さまに、あころれるか
 らやんた」「とんだら、オレエあ指の仇あひえる
 くりえあけてけろしあまのしゃくあ、あにまり言
 うから、あまのしゃくあの仇あひえるくりえたら、
 えかへと思つて開けたけい。

「狐姫ろ、オリエ指あひえるくりえたらえかへ
 あけてけろし「爺さまの選さまに、あころれる
 からやんた」。それでも、あまのしゃくあ、あに
 まじうるさく言うから、指あひえるくりえ、あけ
 てやったけい。こんだ、あまのしゃくあ、
 「狐姫ろ、オリエの手あひえるくりえあけてけ
 ろし「爺さまの選さまに、あころれるからやん
 た」て言ったけい。それでもあまのしゃくあ、あ
 にまりうるさく言うから、手あひえるくりえたら、
 えかへと思つて、開けてやったけい。そうすると、
 あまのしゃくあ、手しえて、ゆりゆりと戸開けて、
 中さひえつて、狐姫ろをころしてしまつたけい。

そして狐姫ろの皮をひえてかぶり、狐姫ろになつ
 たふりして機織つたけい。

ヒッピカッカ、ナナイロ

ククニエケテモ、ナナイロ

オカニエケテモ、ヒトアニエケテモ

ナナイロ、ヒッピ、カッカ、ヒーカッカ

と、歌いながら織つて居たは、爺と母も帰つて来
 たけい。選ああまのしゃくあの声聞りて、「あや、
 狐姫ろ、あめえの言あ、おかしことよし」と言つ
 たは、あまのしゃくあ、「風邪ひてたよたし」と
 言つたけい。そしてら爺あ、「とんだら、あつ湯
 て薬飲んで、熱湯で面洗つてける」と言つて熱
 い湯で薬を飲ませ、熱い湯で面洗つてけるよとし
 たら、面の皮あ、ハラハラとはけて、あまのしゃ
 くあの面になつたけい。それで、あまのしゃくあ、
 狐姫ろを殺したのたとわかつて、爺あ、あまのしゃ
 くあのこと、かんきかんきと、棒ではたえて殺して
 しまつたけい。とつひんはられのひん。

團路り手・高橋春時へ湯田町一 再話・武由 礼子

戦後の混乱がようやくあさまつたころ、私は用事があった盛岡へ行き、かえりに午後の普通の上り列車にのりました。

空席を見つけてすわると、向りに女子学生が二人すわってなにやらしきりに話しています。いくども「教育」ということはかてでくるので、女子師範生かともいいました。小柄な方が言葉にいきあいかよく、背の高い方が自分のような気がします。私は窓にふりかかっていると、田々の仕事のつかれが出たのか、いつか眠っていました。かたと大きい音をたてて列車が動きました。目がさめて、あわててあたりを見ますと、私の下車駅花巻はまたてした。

向いの女子学生たちを見ると、話しかれたのか黙っています。すると小柄な方が突然、「わかっしは昔くから日本の尊い精神といつている、さむとかゆひは日本の貧乏からはじまったと思ひつて言いました。すると背の高い方も反論もせず「さう、貧乏からはじまったの、けりくさい」といいます。

「さう、貧乏からはじまったの、けりくさい」といいます。

おた

ほんとうをいうと、私はさむやゆひというむずかしい言葉の意味がよくわからぬのに、やかてこの女子学生たちが教壇にたつて、

「日本でわかしかる尊い精神といつているさむとかゆひは、日本の貧乏からはじまったのです」と生徒たちに教えるたろうかと思うことでした。

後田太田山口の山荘で、高村さんといろりを囲んで話していた時、このことを話題にすると、高村さんは笑顔で茶をいれながら聞いていました。私に茶をすすめると、

「ほくもさむやゆひを神秘的には考えてはいるが、貧乏からはじまったとはひといし」と言うやいままで聞いたことのないほどの高い声で笑いました。

いま午もとにある小型の国語辞典で、ゆひのところを調べて見ると

茶室や俳句の極致としての趣、

このまゝに出ています。

茶室で思ひ出すのは、天心庵倉見三の茶の本です。

旅の日、常盤線大津港駅で下車、まきはすれに

日

五浦をたすねました。ここは岡倉天心が晩年をすごしたところ。その田の五浦の海も美しく、天心自らの設計で、思慮の場としたという六角堂とそのまま残ってりました。邸内の門にはいまは茨城大学美術研究所と書かれてあり、もつとも印象に残ったのは、邸前の向いの道のそばの、天心の分骨をおさめられてゐる小さい墓でした。ただ土をとりあげただけで、そのまえにすこしの花がかけられてゐるばかりです。その素朴な風情に去りかねて、しばらくたすんでいました。

いままた茶の本を開いて見ると、冒頭につきのように書かれてゐます。

茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、天人に關するわれわれのいつていひの理解を表現してゐるとのであるから。

茶道といよいよさかんですが、この混沌とした世相のなかに、どのようにかがされていくかと思つてゐます。

花巻市高田五の七五・高橋正亮

おたのしみ

● 坂長恥売りますを興味深く読ませていただきました。何時か小田島重次郎先生が書いた、数頭五分前々と同じなのですね。

これは結局どうなるのですか。安易には言えないのですか。坂長とか部長とかは、やはり出世争いのですか。管理社会の中で管理職になるのは、あなたのような生き方として拒否したい気持は理解出来るような気がします。でも、システムの中に組み込まれるコワサが、拒否につなかつてゐるのではないのですか。としたら、坂長恥——出世の認識から脱してはどうでしょう。システムの中で自己をまっとう出来るかどうか、厳しい試練と思ひますか……。よそ者の暴言でしたらお赦し下さい。

水沢市巾田町三〇五・南川比呂史

● 国のために、自分の行為が正当化されるといふ理屈はどうに論破されたのこはなかつたでしょうか。

金ヶ崎町永沢北清水五九の六。

菊地寛夫

變り橋を渡る曰々山のつつきを切に待っています。
 私が思うには、それは立場の変化にすぎません。
 世間では出世とも呼ぶけれども。世の中はとこた
 って、人間を収納するタナのほうに、上、下、タ
 ナ、ヨコと、しきりや引き出しがあるわけで、む
 ろん見た目にも、そこへ整然と整理されていれは
 ハンザイであるのかもしれない。へ人間には上
 目志向があるものですし。しかし、当然、人間
 は物ではありまじから、自分が収納されている
 タナで引き出しに黙ってあさましていられません。
 あなたのように、せっかく上のタナに上げてや
 ると言われたのに、イヤだのなんのと、コテる人
 もマシにあるわけです。私はゴネる人が好きです。
 私自身ゴネない人間ですか。なせなら、どう人
 かいなかったら、タナの掃除を引き出しの掃除も
 出来ないからです。(男って、掃除をしませんね)
 とし、私があるたの立場なら、内心ははあれ、
 黙って受けたこととしよう。私っていう人間はど
 ういう横着者なんでしょう。だから、その反動で、
 やたらと洗濯掃除、整理整頓でこめるわけ。疲れて
 帰って、ホコリを見ると、腹が立つわけ。なに

— 女 世 界 —

を見ても、またないとか、キレイにしろとか口や
 かましいわけ。だから子供にも時として言われる。
 「お母さんが一番みっともないヨ」って。
 私、出世したことはないから、出世したいと思う。
 偉いと言われたことかかないから、他人にそう言わ
 れてみたい。けれども、なせか、観念のすみっこ
 に、「そんなことはつまらないことである。し
 いう固定観念が染みついて取れない。これは、私
 の成長する過程のどこで染みつけたものなのか」。
 この「しみ」こそ私自身であると思つのです。
 宮城県石巻市門崎宮上野町ニミク一四

阿 部 て い 子

圖前略、河北には「みちのくの女たち」を書きは
 めになって、改めて過去の女たちを拾ってみつめ
 てみたら今まで気のつかないことに気がついたん
 です。それは、この女たちは、他人や社会の善意
 を信じることはできなかったものであつたらう。とい
 うことです。世の中って、それほい、いふところ、
 得て不明の存在なのだ。ということに改めて知った
 んです。その一個の女が、社会、他人の善意を信

し、或は重傷されてもそれを信じて死んでしまったとしても、歴史という目、時尚の中で、見ていくと、すべての女は結果的に他人のつ、また社会からの重傷られて死んでいったという事実を兎見して、ぞつとしたんです。このことは、男たちの場合はどうだろうか。これは、このシリーズの後半で、男たちを見つめていく上での私のわくわくする課題というわけです。もし、男も、女も皆ぞうたすれば、(仮説として)ぞうたろう、と思つこうも考えられます。

人間が、個として(個性)生きていくとき、他人、社会と相いれない確然たる境を待つ。だからこの個性であり個なのだ、という事です。とすれば、人間が、まっとうに個として生きていくためには、すべて反人間的、反社会的(全体)姿勢があるものだ——という事です。私たちがおなごでも、おとこでも、一個の人間をみつめ捉え插りていくとき、ぞういうことに、見ざるを得ないということになりませんか。(勝)さて、若し石のこと、どうしても事実だとすれば、次に、それでは、その女が「男が」ぞうにぞういう

おたよ

苦悩をし、棄れし、とらいう行動をとったのか、とつていこうとするのか、を描く(捉える)ことになるわけですか。(勝)たか、以上か、若し一つの観念論であつたとしたら、おたよの女たちには、私を重傷する行動をとるかもしれない例をば、おたよの女たちにも共通した一つの法則めいたものがあつたしというふうな。ぞういう結果が出たら、またおもしろい命題ということになるんですね。敬一の目に狂いかあつたか、先の仮説が正しかつたかなどの——。

私は、インテイアンのケレルと、ニケ同一席にくうしてみて、つくづく思つた。この人のきわ立つた個性は、過去のインテイアンの歴史の凝集として、現在の空間に立つてけるからなんだ。たか、過去を考えない(ようとしなれ)、今のほつと出の新人歌手等の、あの虚に吠える空まじい一次元的な空間だけの響きよ、と。これらはたか、虚として実を共鳴できずに消えるだけなんだ。もし、あの中に未来に生き残るものがあるとするは、奴はきつと俺たちの気づかないすこい過去の歴史性を秘めてける奴に違いない——と。

折居三ツ詩集ノト 12

ハルピン

ハルピンについたときは

八月十五日朝

今朝 天皇の

おことはかあったという

駅には武装した汽車が構内にいっほい

ホームにいっほい とまっていた

汽車に網をかけ 首をかり

ものものしい

ハルピンの街は午前中は日本の兵隊さんが

整頓していたけれど

午後から がらりとロシアの兵隊さんが

整備に変わった

そして外出を許されぬ

ロシア人のあの「タワイ」*

タワイといつて腕をくんで

つれてゆかれるおそろしさ

避難民

ハルピンの満拓公社

ここは開拓団やら義勇軍の

食糧やら衣料を分配するところ

七階もある大きな建物に

避難民がきつしりと入っていた

兵隊にゆかない事務所の方々が

十人ぐらいた

リニツク一つだけの私達に

チキハキと指図をしにくれた

大きな部屋にリニツクを置いて

すわったところが自分の場所となり

寝起きするところとなった

発疹ナフスで亡くなる人

次から次と死んでゆく

*タワイというふうな俵い方があ
る候かな言葉で此の場合は柔い（ロシア語）

見張りに来る

夜になるとロシアの兵隊が

（十四頁へ）

根の 乳便り 垂里

12

石川純子

もうすぐ十二になる兄の友か、ここしばらく焚き火に興じている。ハカみたしに煙にむせてせき込んでいたかと思ふと、あこあことききた火をアホンと見つめていたりする。

最初の頃は、その火がもったいないね、せつかくたこの手焼けてみたら、焼肉でもしようかなと、言い寄ってみたが、いつころにのってくれない。何かのたぬめというふうには心が向かないらし

しい。とにかくこのアホンの時向は、弟にさえ介入されたくないようで庭と火を一人占めしているのだ。

台前に立っていると、まぐらかぐらの蕨園の向こうにはあーと燃え上った火が、障子越しに見える。そこだけが火の色にやさしい。兄ちゃんのアホンがまた始まったと思ひながら、わたしのアホンもその火の色に誘われてふくらむのだから、火遊びはやめろなむというふうには心が動かない。それよりか、庭から上がる小さな火がニミ目もなかつたりすると、なにやら淋しく、ついで、あう？今夜は？なむとよけいな声をかけて叱られたりする。せつかくねていたホクの火の虫起こしたりして、今夜は宿題が山のようにあるからかまわしてたのに、なむと、とっちが親たかわからぬように威張られたりするのである。

このアホンが先日、焚き火の向うからアハハラたしと、すつとんまよな声をあけてよこした。今頃どうしたのだろう。死んだアハラとぞつくりの虎毛の猫でも現われたのかと顔を出し

て見ると、火の明るさに誘ひ上がった物干しのタオルケットにコーンして居る。

なる程、この兄は、赤ん坊の時から猫のハルラを抱かれ、このタオルケットにくるまれて寝た。

六つの時にどのハルラに死に別れてからは、残されたこのタオルケットが、ハハラ々となったのである。その上、ふとんのえりにぬいつけたタオルにまで猫の感触を求めて「予ハハラ」と名付け、その代用品の「ハハラ」と「予ハハラ」に抱かれ、眠ったのだ。そのタオルケットのハハラもここ二年程、押入れの隅に忘れ去られ、兄の記憶の底にたけ生きていたのである。

「今晚から、ハハラと寝るぞあー」

庭かろなんともうれしげな声が返ってくる。その夜、猫のハムセまで抱き込んで寝ている兄に「ねえ、ハハラとハムセと歴代の猫一緒にしたりして、けんかしない？」と云ひかすと、

「するもんか。いい気持だよ」

まるっきりあのアホンの続きの顔でにっこりと笑ってみせる。

この、ハハラを洗おうとすると、ひどく抵抗

する。

「ハハラが、たんだんやさしくなっていていくと嘆くのである。

生まれた時からつきあつて来たタオルケットたもの、洗われる度にタオル地がザザめき、こわばり、あのふつくろしたやさしい猫の感触から遠のいていくのはしかなかったのだ。か、このような幼児の如き許えにめんくらった柏子に、わたしはふと思ふ。

新しい年の四月かくれば、もう中絶生である。この手に、ろともあることの時間が、後とれ程残されているのだろうか。

そう思ふは、火焚きに興ずるあの、アホンの時間がきらきら輝いてみえてならぬ。そのきらめく時間の減っていくことが、とりかえしのつかないことともあるように、いとおしくてならぬ。



少ししてもすきのある人はつれてゆかれる
 子供のない人は
 る供をかりてだいて寝る
 寝ているところをけとばしたりして
 軍靴のまま

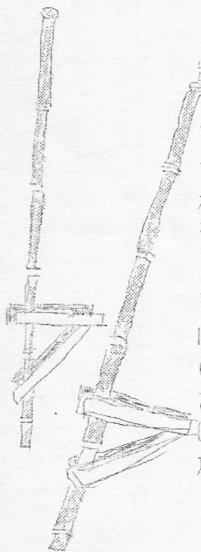
カッカッと音をたてながら
 ローンクをもって
 夜になると来た
 なんのためにどうするのかわからない

五カ林という廓の入口で
 わたしたらの部屋の前で
 一緒に寝ることになった
 夜になると長い着物を着て寝る
 ある夜つれてゆかれた
 帰って来ないかと思つたら
 ヨレヨレになつて次の朝来たという
 やはり自分の気がまゑか必要だと思つた
 みんなで話した
 五カ林の女の人か来なかつたら……

わたしたちのうちから
 誰かかつれてゆかれたのではないだろうか……と
 日本に来るまでロシアの兵隊に
 つれてゆかれた人は
 一人もいなかった

一致団結 日本に帰るまで
 共同体をくずさなかつた
 馬のお金があつたから

出し分の少ない人も
 多い人も みんな馬のお金があつたから……
 まとめておくと危険だからと
 あの頃のお金で一人四百円ずつ
 小さい子供にもわけられ
 一人分ずつ出してつがうことにしていた



火葬場の生誕

X日X日

待っている物が

なんであるか

分りつつ人々は待っていた

味のしみたさといも美味さ

青物のおひたしの色の良さ

ハンにつまんで食べて

茶をすすりながら

待っていた

待つ人々のなかにあつて

赤子はセロファンのおみこど

菓子をしゃぶりはじめ

ふれてみたくなる
まうやかな存在

赤子は祖田という死者との

かかわりにおいて

この世に生誕した

赤子の生誕をたどってゆくと

木と同質になるのだという説

その木をたどると

さらには海洋にゆきつくたろう

心のどこかで、いつもなつかしい

叫び声をあげている 海洋に

吾等はこの世に生誕する

台風に荒されて

黒ぼしになつた 縮穂の詠

風よけの大木が 風で倒れ

屋根をつぶした詠

互いに素性を述べて

名のりをあげ

この地をはなれた香も

かの地からやってきた

死者の顔立ち

火災に包まれ

どの部分から消え始めたか

という向いは 胸底に伏せ

いまは

酒も飲み交しつ

にぎやかな

火葬場の一期一会

■ 朝の満ち干が、月との関連であり、母の旅立ち
は、その満ち干と関連していたと聞いた日から、
月がなつかしいものになった。

千江のむかし、月にかぐや姫が昇って行ったよ
うに、母も月にさそわれて消えたのだろう。

地球のまわりの三十倍の果て、月に到達した守
宙飛行士の知らざる月世界は、草木見あたらす
山川なく、砂嵐し吹きすさか下北半島の地獄の貌、
恐山かまじう世界だとしても、月がなつかしい
ことに変わりはない。

母を形作った数十兆の細胞の一つか、月の砂に
ふれたかもしれないのだ。朝の満ち干によって、
カニは移動活動をくり返し、ウニは満月の夜にろ
を空む。

九月十一日午前二時四十分。母の鼓動は絶えた。

その日。山脈を越えてはるか、宮古島の藩朝時は、
夏時を指して、たかひ明けるにかけ、千朝に変わって、
午前二時四十分、母の鼓動は絶えた。新宙の訃報は伝え
てくる。